

魅惑の安楽古道



亀山市の北部、池山の地から滋賀県の土山に抜ける細道があった。

安楽越と呼ばれ車道ができる数十年前までは地域の人々の交易道だった。

今は人知れず樹林に埋もれる古道を訪ねてみよう。

安楽古道を歩こう会

2005年5月版

安楽・鈴鹿峠広域地図



地図のマピオン使用



鈴鹿の山風 HP より

東海道を往来する旅人にとって鈴鹿山脈は箱根と並ぶ難所であった。標高約 1000m の山々が約 50Km に渡って連なり特に伊勢側から京都方面に行くには険しい坂を登らなくてはならなかった。東海道は今の国道 1 号線に沿っていたがその少し北に間道として安楽越があった。関所等が無く安楽に越えられたのでその名がついたと伝えられている。

ある冬の日、亀山市の景勝地、石水溪から安楽越への林道を車で走っていた。ふと左側の車窓から冬枯れの樹林越しに道形が見えた。あそこには知らない道があるようだ。車道ができて半世紀も前に消え去った安楽越の旧道かもしれない。「若い頃は毎年田村神社の祭りに通ったものだ」と語る坂本集落の古老の話を思い出した。豊臣秀吉も 3 万の軍勢で安楽越から伊勢に攻め込んだ記録もある。千年以上東西の交易に、また軍事に利用されてきた道である。わずか数十年で消え去ることは無いはずだ。急に興味がわいてきた。

コブシの咲く頃、独りで石水溪の太閤石付近から入ってみた。ここは以前にも急坂を登り山越えして石水溪開発小屋の辺りまでは歩いたことはある。この部分は今でも踏み跡がはっきりしていた。しかしそれより上に向かう大半の部分は今どうなっているのだろう。沢沿いに進むと苔むした石とはっきりした道形が上に上にと続いていた。おそらくは車道の工事で埋まったのだろう。道形が消え車道にぶつかるころもあった。それでも多くは、かつて道だったことをもの語るように落ち葉に埋もれながらも道形を形づくっていた。何度か訪れルートを地形図に書き込み写真に撮った。暑い日には旅人の喉をうるおわせたであろう沢の流れは今でもこんこんと流れていた。凍てつく冬の日には北風をさえぎった谷間の樹林は往時のままだろうか。砂防ダムの工事で埋められた付近はゴミが堆積していた。それでも大半の旧道は健在だった。笹やイバラに覆われているが道形は残っていた。ついに近江との国界、旧安楽峠に立つとそこには滋賀からの風が吹き抜けていた。

この付近は近年第 2 名神の工事で大きく様変わりしてきた。しかし幸いにして安楽越の旧道はそのまま残った。これは私たちの歴史的な財産でもある。階段歩道も立派な標識も要らない。昔のままに笹刈り程度の整備を続け安楽古道として次世代に残ればそれでいい。老夫婦でなかよく、また子どもや孫を連れて石水溪から旧道を安楽峠に登り車で車道に戻ってもいい。

時空を越え自分達の祖先が何百年も歩き続けた道をいま静かに振り返ってみよう。

2004 年 8 月 「安楽古道を歩く会」 仙の石

地図は[ここ](http://www.gis.pref.mie.jp/)を使用しました。http://www.gis.pref.mie.jp/





安楽古道（赤線）と車道（黒線） 数字は出発地点からの時間（参考程度です）

安楽古道は池山の集落の西端から始まっていたが今では道路や田畑が開発され、その痕跡は失われたが石水溪のキャンプ場付近からたどることができる。

石水溪のキャンプ場の車道を登ると左側に「ハイキングコース 至 新路を経て京道」の看板（写真右参照）がある。ここを基点に安楽古道をたどることができる。



川に降り石伝いに対岸に渡ると太閤の腰掛石と呼ばれる巨石がある。

旧来の伝承による腰掛石

はもっと大きく形も平らで太閤が座ったにふさわしい形状だったそうで現在の場所より 50m程下った地点にあったが砂防ダムの敷設で土砂に埋もれたため地元の有志が現在の石を腰掛石としたそうである。この安

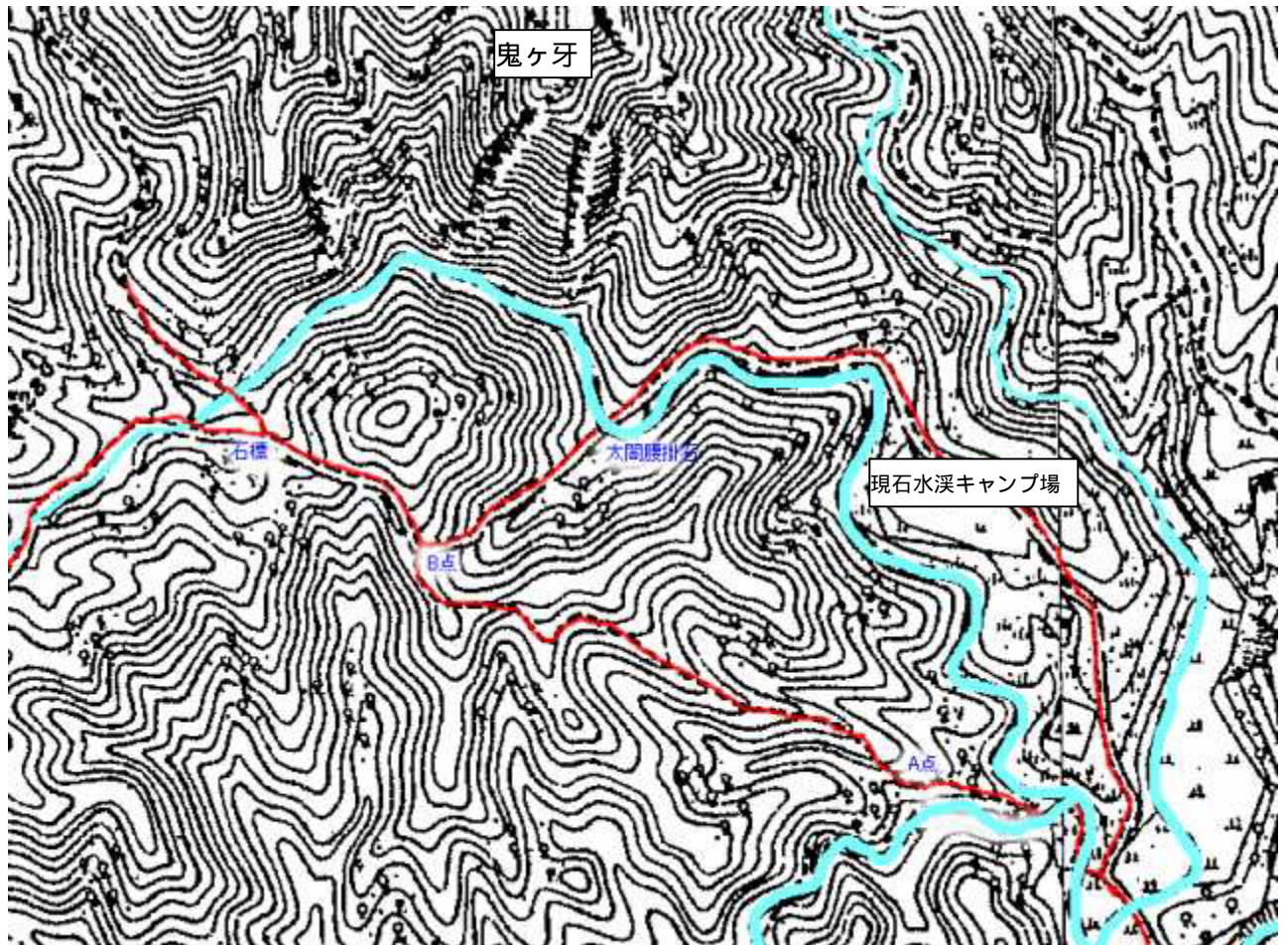
楽越を太閤（豊臣秀吉）が通ったのは史実からも明らかである。

天正十一年(1583)正月二十三日、秀吉は近江安土城を出発し総勢七万五千とも十万とも言われる軍兵を三手に分け、一手を時多良口（五僧峠越）、一手を君ヶ畑口（治田峠越）、そして自らは三万五千を率いて安楽越えに進軍したとされる。実際に石に腰掛けたかは、ともかく良くこんな辺境なルートを取ったもので迎えうつ伊勢国主だった滝川一益に対して鈴鹿峠越えよりは勝算があったのだろう。

この腰掛石の辺りから急坂を登る踏み跡が続く。幅は1m程度でほとんど昔の姿のまま残されており蛇行しているの比較的楽に登ることができる。



この道が京道（京都に続く道の意味）の新路とされているのはなぜだろうか。そうすると旧路があるはずである。地元の古老の話では尾根伝いに登る道が南にあったそうである。坂を登りきった峠状の場所 B 点から左方向に明確な道形が降っている。ところどころ崩れてはいるが眺めのよい尾根道を 15 分ほど降ると新しくできた林道に出た。入口 A 点には朽ちた京道の道標があった。後日、古道研究者の S 氏から明治 25 年測図、同 27 年製版の地形図をいただいた。当時のことだから旧日本陸軍陸地測量部が作成したものである。これを見ると当時新京道も旧京道も描かれており利用されていたようだ。さらに後述の石標は京道と現在の船石林道への分岐を表示していたことがわかる。実際に歩いてみると尾根ルートである旧京道の方が緩やかで楽である。



明治 25 年の貴重な地形図 川と道は色で示した。

A 点の京道の朽ちた道標



尾根伝いの眺めのよい京道旧路



京道（新路）に説明を戻そう。
坂を登りきると峠状の場所 B 点に出る。
歩きなれた人ならそれほどでもないが足腰弱い人ならここまで登るのは難儀なことだろう。
休息の場所だったと思われる。
ここから左にも踏み跡が続くがこれは前述の京道旧路である。右に行くのが安楽古道のルートですぐにピークを越え下りとなる。



この辺りは良く踏まれて笹も無く歩きやすい。
道幅も 1m 以上ありかつては人々が頻りに往来した様子をつかがわせる。今なら車道で最短コースでいけるが往時は三つ淵と呼ばれる急流絶壁に囲まれた難所を通過できないためこの小山を乗り越えず迂回ルートが使われたわけだ。



今では車道が通る三つ淵付近
往時は最大の難所だったそうだ。



この迂回ルートとなっていた小山は現在では樹林が茂って眺望はすぐれないが以前は北方向に鬼が牙の絶景が見えたそうだ。できることなら再現したいものだ。



石水溪のシンボル鬼が牙はまさに鬼の牙を連想する岩山である。人を寄せ付けぬ絶壁とそこを飾る松のコンビネーションが山水画の世界をかたちづけている。
標高は 500m 足らずだが石水溪入口から見る高度感は 1000m にも思われる。
写真は上の地図の小山の頂上付近の展望岩から撮った。まさに鬼の牙である。

坂を下ると左側に傾いた石標がある。左京道 右山道 裏には大正三年 田中音吉と読み取れる。田中音吉は製糸業で財を成した当地の有力者で今でも彼の寄贈した石標が各所に残っている。しかしこの石標は謎だった。左京道とあるが実際に左方向に道形はない。何度か探索したが急な尾根を越えないと次の道形につながらなかった。現地調査では不可能と判断し地域の長老に尋ねることにした。幸い大正 13 年生まれの早川一成氏と懇意となり安楽の昔をいろいろ語っていただいた。問題の石標は現地に同行いただいた結果本来は下り坂右側にあったが雨水の流れで溝が掘れて転がっていたのを左側に埋め戻したそうである。つまり京道はそのまま、まっすぐ下る道であり右山道は三つ淵の沢に向かって下る細道を意味していた。これで謎がとけた。



右側にあった石標だが溝ができて場所を移された。石標の右山道とは溝の部分を示す。



案内いただいた長老、早川氏
安楽の山の生字引である。



左京道 右山道の石標



石標の裏側 大正三年田中音吉とある

ここから安楽古道はまっすぐ下って沢を渡る。1965年頃砂防ダムができ土砂が堆積して容易に渡れるし良いキャンプ場になっているが以前は両側絶壁で渡るのは転石伝いだったそうだ。



ここから安楽古道は車道を横切る。この部分は以前は左右がつながった小山だったが道路建設で掘り割った場所だ。右の臼杵岳の麓を横にすすむ旧道が残っている。昭和 30 ~ 40 年代に付けられたらしい木板の表示が残っている。



左は絶壁地帯 右は臼杵岳側



安楽峠 名古屋歩く会と読める木板

今は使われていない石水溪開発小屋の手前で古道は再び車道を横切る。これは急峻な沢の絶壁地帯を避け終えたからだろう。ここから古道は沢を渡り沢の左側（上流から見て右岸）を緩やかに登っていく。



沢に下りる場所を示す早川氏

地形から想像するとこの部分は先人達も苦労したようだ。前記、石標からは左の小山を乗り越えるか急な沢を横切り絶壁を避けて山麓を迂回するしか方法は無かった。豪雨の後には沢を渡るのも容易ではなかったはずで、どちらにせよ難所であった。





沢越しに車道を見ながら古道は続く。部分的に倒木等あるが笹はそれほど茂っていない。道形は明確で往時をしのばせる。この辺りは林業や炭焼きに利用されたようで平地には作業小屋も残っている。



今ではこの道はほとんど利用されていないようだ。倒木がそれを物語っている。それでも笹がそれほど茂らないのはやはり日照が少ないからだろう。今回古道を調べても南向きに開けた地点では笹が猛烈に侵入し、もはやそのままでは通過困難な場所も多かった。

やがて沢にぶつかりそれを渡る。そこから両側笹の多い道形が緩やかに登っていく。



道形ははっきりしていて何百年間も人々が通過していたことをしめしている。しかし今では誰も通っていないようだ。もはや完全に廃道となっている。やがて突然に車道のガードレールにぶつかる。



車道に入ると古道を失う。注意深く車道の右側を注目して数十m登ると掘割のくぼみが見つかる。ここから笹をかき分けると道形が現われる。苔むした石が年月を感じさせる。この道形は更に上にたどれば車道にぶつかり消える。私の推測では左に下り再び車道を横切るはずだがその道形は見つからなかった。昭和30年代の車道工事で埋没したのだろうか。更なる調査が必要である。



古道は車道の左側から再び始まる。先に横断した地点から約100m上った地点に車道から左へ入る細道がある。ここを入り笹の茂みを抜けると驚くほどはっきりした小道が現われる。左は沢、右は小山の斜面でほとんど昔のままの姿が残っている。



やがて沢にぶつかり古道は右へ登る。気持ちのいい滑滝が水を落としている。試しに沢を越えると平坦地に出た。昔は炭焼き場だったようだ。



古道はこの沢の右側を緩やかに登っていく。道幅は0.5m程度だが明確である。途中平坦な広場もあり良い休憩場所になっていたろう。今でもキャンプができそうだ。



上部の車道工事で岩盤を崩した岩石が落とされたり部分的だが悪場所がある。しかし全体としては沢沿いの快適な道である。やはり長年にわたり人々の往来に使われてきた重要な道である。歩きやすく、清浄な水も得られ山向こうの村に嫁ぐ女性でも歩けただろう。また茶摘みの季節には出稼ぎに行き来するものも多かったそうだ。また安楽と土山は親戚関係も多く仏事のたびに行き来したことだろう。



日当たり良く沢が左手に流れる
平坦な場所がある。
冬暖かく夏は涼しく
休憩にも利用されただろう。
今ならテントを張ればキャンプが
できそうだ。

やがて沢は左右に分かれ左の沢は侵食で深く切れ込んでいく。この左の沢の岸は急峻に両側切り立ち、昔から利用できなかっただろう。右をたどると上に向かい車道に出る。古道は車道の下を横にトラバースしていたようだが近年の砂防ダム工事で多量の土砂の堆積場となり古道はその下となった。



安楽古道はこの土砂の下になった。
これは 10 年ほど前の砂防ダム工事の残土
である。
この区間約 100m は安楽古道を利用できな
い。沢の侵食も激しく下を流れる沢も両岸
急峻である。



再び車道を離れた安楽古道は杉林の中に行く。上部の砂防ダム工事からの残土が流れ込んだようで道形は不確かであるがどこでも歩ける。
やがて小山の斜面をぬうように登って行く。



上部の車道から捨てられた廃車や自転車があった。
嘆かわしいことだ。
安楽古道は車道から離れている部分は昔のままに維持されているが車道の直下だと岩石や土砂、更にはゴミの捨て場となっていた。
高度成長のもたらした負の遺産を引きずっているのである。
この安楽古道の旅も終わりに近づいた。
最後の急坂をあえぎながら登る。
うんざりするような車道から離れてほっとする空間でもある。
ついに樹林に囲まれた旧安楽峠に到達した。
心地よい近江の風が身体を吹き抜けていく。
どれほど多くの先人達が同じ思いでこの場に立ったことだろう。
時空を超え峠越えの苦しみを共有するとき、戦乱の無い時代、自由な山歩きができる時代に生きていることの大切さと、しあわせを思う。



峠間近

ついに安楽峠へ



完

この冊子はペンネーム仙の石こと伊藤が個人的な興味で調査作成しました。安楽古道を再発見するきっかけになれば幸いです。

Email amani@helen.ocn.ne.jp

その他参考情報はホームページ 亀山市民文芸サイト「温故知新」をご覧ください。

URL <http://www6.ocn.ne.jp/~kameyama/bungei/>

参考資料 秀吉の伊勢侵攻

愛知厚顔 70 代元会社員 2003/8/31 投稿

天正十年(1582)、羽柴秀吉は主君織田信長の仇、明智光秀を山崎川の合戦で討ち滅ぼしたのを機に、いまや日の出の勢いであった。ところが柴田勝家などの先輩武將たちはこれが面白くない。当時伊勢国主だった滝川一益も勝家と図って秀吉に対抗した。天正十一年(1583)正月二十三日、秀吉は電光石火、近江安土城を出発し伊勢侵攻の行動を起こした。雪が溶けると越前の柴田勝家の軍が行動を起こし、滝川と連合して攻めてくるため、先手を打ったのであった。彼は総勢七万五千とも十万とも言われる軍兵を三手に分け、一手を時多良口(五僧峠越)、一手を君ヶ畑口(治田峠越え)、そして自らは三万五千を率いて安楽越えに殺到したのだった。迎え撃つ滝川勢は伊勢平野での合戦に戦力面の不利を悟り、鈴鹿山系安楽越の天然の要害を最大に利用する作戦を立てた。秀吉の軍勢は雪の山女原(土山町)を発し、国境の安楽越を難渋しながらも越えてくる。一方の滝川方は前もって安楽川沿いの細い崖道を随所で切り落とし、両側の岩山には逆落としの大石、大木、丸太、櫓を各所に設けて待ちうける。攻めるほうは大軍でしかも武器、兵糧、軍馬をそろえた重装備、しかも土地不案内で険路である。これに比べ守る側は天然の要害に十分な邀撃体制と、土地カンのあるゲリラ戦に対抗する。これにはさすがの秀吉も攻めあぐねてしまった。悪いことに溪谷の道は滝や淵沿いの岩壁で馬の爪ほどしか狭い道幅。ここを雑兵が馬の口を取ってソロソロと先導して渡り、もう一人が馬の後ろから尻尾を持って押して渡そうとしたのだが、馬は尻込みをするばかりで進もうとしない。それを見た滝川勢はいっせいに弓矢を射かけ、大石や大木を崖の上から投げ落とす。とうとう多くの馬が深い淵や滝壺に真っ逆さまに転落して死んでしまった。そんなことを繰り返して強引に突破しようとしたが、ますます犠牲ばかりが増える。「困ったものだ。なんとかよい方法はないものか...」攻める側の首脳は悩んでしまう。そのとき総大将の秀吉は『誰かこの山にくわしい土地の人間を探し出せ』と命じた。そのとき召し出されのが、山女原(アビノ原)へ養子できていた池山集落(亀山市)出身の獵師だった。池山と山女原この二つの山間集落は同じような土地環境のため、安楽越をはさんで交流があり、お互い嫁取り婿選びも「山のむこうから」とよく行われていたのである。そして『なんとかこの山を越える方法がないか?』との秀吉の問いに『この山には他に道はありません。あくまで谷沿いに進むしかありません。その方法は私にまかせてください』と、この獵師は自信たっぷりに言う。『よしまかせる、存分にやって見よ』秀吉に見込まれた男は、一人だけで長い紐を結んで馬の口を取り、『ハイハイ、ドウドウ』かけ声をかけながら、難なく一気にこの険しい崖道を通り抜けてしまったのである。それを見た他の雑兵たちも一人だけで馬の口だけとって「ハイハイ、ドウドウ」駆け足でつぎつぎに渡り、一頭も淵に落ちることはなかったのである。なまじ人間は頭が良すぎるばかりに、余分なおせっかいはしていたわけで、馬は馬なりにその本能を信じてやればよいと云うことであった。この淵のある険路は安楽川石水溪のどのあたりになるのか...、そこは当時〔馬落し〕または〔駒落し〕と呼ばれていたらしいのだが、いつしか忘れられている。たぶん石水溪キャンプ場の少し上流にある岩坪三つ淵あたりであろう。いまは車の道が走っているが、むかしの山道は険しく、キャンプ場あたりから沢をわたり、正面のピークを乗り越えて石水溪開発小屋あたりに出ていた。いまは廃道になっているが、恐らく滝川勢はこのピークと向いの鬼ヶ牙の岩山に砦を築いて秀吉を待ち受け、大石や大木を投げ落としたに相違ない。頭上にのしかかる鬼ヶ牙の迫力から〔馬落しの険〕を実感するのである。このときの戦いで秀吉が腰を下ろして休憩したと伝えられる大石「八畳岩」が少し下流にある。滝川軍もよく防戦したが、秀吉の勢いは止められず、春を待たずに降伏してしまった。それから間もなく越前の柴田勝家も滅ぼされてしまった。

参考文献 「太閤記」 菊池寛「日本合戦譚」



みつまた秘話

今年も坂本の奥深く野登山のふもとにミツマタが咲き乱れています。何十年も前からかわらず繰り返されてきた自然の営み・・・でも多くの人に知られるようになったのはつい2年前からなのです。このいきさつを知る一人としてここに書き留めておきたいと思います。亀山の北部、鶏足山と仙ヶ岳は標高こそ 1000M に届きませんがその歴史と風格は他の鈴鹿の山々にけっして劣るものではありません。この二山を結ぶ尾根を仙鶏尾根と呼びその深く沈んだ部分から南に降りて坂本に至る山道があります。その途中にミツマタの群落広がっています。地元の林業関係者以外に通る人もないマイナーな場所です。こんな辺りな場所になぜ先人達はミツマタを植えたのだろうか？誰もが持つ疑問です。坂本集落の古老の話では大正時代の頃、和紙原料として植林されたいが結局使われることもなく半ば野生化していったのではないかということです。あの急斜面への植樹はそれは大変なことだったでしょう。それが時代の流れで換金にはならなかったけど人々の心をいやす場になるなんて想像もしなかったでしょう。ミツマタは過度に日の当たらない、ほど良い水はけの場所に適合した植物でその条件に合う場所で自然と群落になったと考えられます。枝が3つに分かれることで三叉と命名されその分岐の数で成長年数がわかります。花の終わった後には小さい種子をつけこれで子孫を増やしていくようです。成長は遅く人の身長程度でも4~5年以上かかっています。沢沿い等では大きく成長し幹も太くなっていますが谷ひとつの違いでも群生は見られず植生には興味が湧きます。

市民活動ネットワーク「きらめき亀山 21」から生まれた「自然を愛する会」で坂本棚田保存会の星合さんからミツマタのことを聞きました。山仲間のIさんからも同様の情報を聞き12月頃探索に行くと既におびただしい数の花芽が見られ春にはすばらしい眺めになると確信しました。その後春までに数度、下見を繰り返し「きらめき亀山 21」の場で早春にミツマタを見にいく参加者を募ったのです。2002年の3月18日自然観察クラブの中学生も含む約30人が坂本の林道入口にそろいぞろぞろと奥へ進みました。ほとんどの人が始めて通る細い道でした。30分後現地に到着するとその見事なながめに歓声が上がりました。山全体が黄色い花で覆われているのです。花に埋もれてお弁当を食べひとときを楽しみました。これに参加した皆さんから口コミで次第にうわさが広がり翌年の春(2003年)には盛大にミツマタ祭りが開かれました。新聞にも紹介され林道も整備されて大勢の人が押し寄せました。このときは花の数が前年の約半分と少なく淋しかったのですが初めての方には楽しんでいただけました。群生地が知られると残念なことに車で林道をはいり根こそぎ引き抜いていく人も出てきました。ミツマタは良質の和紙の原料として知られていますが成長が遅くあの山のミツマタを乱獲したらたちまち絶滅するでしょう。やはり和紙工芸用には成長の早いコウゾや休耕田に植えたミツマタを使うべきです。ミツマタの花期は2-3週間と長く早春のシンボルフラワーとして地域興しに活用し、あの素晴らしい一帯をそのまま次の世代に残すことはそれを広く紹介した私たちの責務だと思います。

作：仙の石

